

骨折となり症状が軽減したと考えられるテニス選手の 距骨後突起骨挫傷の1例

○奥平 修三 (おくだいら しゅうぞう)(MD), 松田 秀一 (MD)

京都大学 整形外科

距骨後突起傷害は内反捻挫や足関節底屈強制により起こり保存的治療を選択することが多いとされている。今回、保存的治療で足関節後内側痛の改善を認めず、骨折となって症状軽減した症例を経験したので報告する。

【症 例】

19才 女子テニス選手 クレーコートの試合で足関節を内反強制され受傷。痛みが改善しないため2週間後に受診。所見：足関節後内側部の圧痛 (+), 足関節底屈時痛 (+), 長母趾屈筋腱の底屈時痛 (+)。正座可能。単純X線検査で明らかな骨折を認めず、MRI (脂肪抑制画像) で距骨後突起に high intensity 像を認める。

【経 過】

競技継続を希望するため、足関節底屈制限サポーター装着、超音波骨折治療器 (セーフス) および外反接地トレーニングなどの保存的治療を施行も、競技中は運動時痛が残存していた。治療開始後5ヶ月で足関節底屈時痛軽減したため、CT 検査を施行したところ同部の骨折を認めた。現在 (受傷後9ヶ月、骨折確認後4ヶ月) まで症状増悪なく競技を継続している。

【結 語】

保存的治療が奏功せず、骨折となって症状が改善したと考えられる1例を経験した。早期手術治療も考慮すべきであると思われた。